

前書き

ジーン・シュルツ

チャールズ M. シュルツミュージアムアンドリサーチセンター 理事長

ファンの間でよく知られているように、スパークーは「ピーナッツ」というタイトルが嫌いでした。「ピーナッツ」が登場人物の一人と思われるに違いないと彼は断言していました（それはまさしくその通りだったのですが）。彼は題名を「Good 'ol Charlie Brown（おなじみチャーリーブラウン）」としたかったのです。チャーリーブラウンこそ漫画の主人公でした。

そのころの唯一の女の子の登場人物は、後にパティと呼ばれる子です。彼女はかわいそうなチャーリーを殴りつけ、ピーナッツ連載2日目にその主役の座を奪ったのです。その2日後には、彼女は別の男の子の傘を雨の中ひったくります。もしかすると、これは1950年10月2日の「チャーリーブラウン、あいつ大嫌い」という意地悪でそれでいて本心からでた言葉を言ったこの男の子に対する仕返しなのかもしれません。

しかしながら、スパークーは意識して漫画の中で男女の役割のバランスを取っていたでしょう。チャーリー・ブラウンの気持ちは、スパークー自身の様々な思い出が元になっています。しかし、女の子の気持ちは何が元になっているのでしょうか？

スパークーは周囲の様子を細かく観察する人でした。「小さな女の子たちは男の子より社会的な成熟早く、男の子たちよりも優位に立つ」ということに彼は気が付いていました。スパークーは彼自身の3人の娘の父親でした。長女メレディスは元祖ガミガミ屋でした。エイミーとジルは名前もピーナッツの初期に登場しました。



上の3コマのストリップを見てください(図表1)。スパークーが実際に父親になる前に

絵が描かれたものです。ピーナッツ2日目のストリップの「女の子は砂糖とスパイスでできる」というアイデアの元になったストリップとして、とても興味深いものです。このストリップはピーナッツでは、4コマにされています(図表1)。スパークーは、4コマ通して何でも無いかのように歩き続けさせ、パティのしでかすことのタイミングをよりおもしろく、びっくりするようになっています。しかしながら、どちらのストリップでも、パティの「POW(ピーナッツでは「whop」)は、「ローレルとハーディ(訳注 かつてサイレントからトーキーの時代にかけて活躍したアメリカのお笑いコンビ)」と同じドタバタ芝居風です。

「どうしてパティなの？」と質問したなら、スパークーはこう答えるのに違いありません。「面白いからだよ。男の子が女の子をぶっても面白くないけど、逆になったらびっくりするだろ。それが、おもしろくするのに大切なんだよ」

パティとバイオレットは男の子たちをいつもぶってばかりいたわけじゃありません。時にはチャーリーブラウンをチャホヤすることもありました。男の子と女の子のつかず離れずの関係は、1954年頃までつづきました。その後、ルーシーが成長し、パティとバイオレットの乱暴で気難しがり屋な性格を引き継ぎました。

この展覧会へお越しになった方の中には、初期のピーナッツでの女の子たちの力強さに驚く方がいるかもしれません。しかしながら、この初期の女の子たちのキャラクターをもとに、読者である私たちとよく似た性格を付け加えたり、誇張したりしながら50年にわたって、彼は漫画を書き続けたということは、誰もがうなずいてくれることと思います。